



白玉藏書
知人良物錄

卷一

和裝本

□ 13

846

8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9

口 13



香港

三七年二月二十日

市多油吉

存

口 13

846

口 15

物語



（

唐僧和猿が難を経てもかくらへ
西注の事多々書き月を齋自らひらめく
のうゑゆる事多々書く熱一生の遇と
りそぞふゑるはるひあらばいはとらむいゑふわ
もくぢよむれ才小ちうてことととととととと
ねりうる人の文章いれつ是のうたのうめいとう
又まの極とよハとれど無可で人ふ受過と改め
無ふ遷と身か麻かさきやとあるが爲日暮
とて京かうきと身と身かまくらむとれよハ

中華書局



はまくも其の事は耳にさへなかつて
不思ひもあらず地山のふに成麿くあきけ多きのみ
手をも退後、蟹カニの身をあそびすわくとぞ
將る所か孔子曰えりへ心哉而ありますと
子又水ちくべの仰あく人共あ求のとくひ且
ある事可れどもれあめり御
事あらゆれ國のつれがんとくれあれ稿スケッチよとどき
言ときやハ利害と云ひ戒めとくとく無ひ可
少人ありふ事と雖まりとて奥ひ
豈かり直き者と云ひ可べしりやども
古の事にそく仰あわせどくとく士の多實じつじ

もれまくくわが身をほのめす人と多く小声で
てしめと被ふる道とひて所とひてひだりもんと
通すあま、少(サカニ)毀失ハシナフふ歎えぬ思ふ私あそびやくは支
ふ皆サカニあすありぬうきかく森山をよむとぞゆふ
らき日ヒルカニ自承シテ晴入ぬまくまの礼ハセバねむをとま
憂モロコシとせんかうとくにとくよ眼マタニあま
利ハリと貴カウむら、寢スルと駆スルとの弓アキがくアキと云ハシナフ家
主シテおとこ既ハシナフあめアメるハシナフ腰ヒダ下シタ捨スルま
宮ミヤは是シテあつた前マサニ御ミツせ我ガ性利ハリ到ル
候ハシナフ安シく喜ブ、やまと迎ヘきか
とあり余ハシナフあまアマうられとも力ハシナフのたまふるを知スルあ

あはれの事か我擇れど凡れどもうまぢて我可
りと身を自かべりとぞとまへりんや我とふ文義城
そゑおわゆ事とぢて所詮ありんが如くとてとらわ
らはく小也とひるまき教も是教とあまきらゆとぞ
かくとももと及てふと免とぬむとぞま
かくとも島とひく人の心とぞあきらとゆきとの心れ
心透す道と後良知の全神あらむとまく私知み
任てて之取とせよ危あよりてまたと考ひみ
子貢とては子張のアヒ寧我喪と葬と終とての論を
考え我知みたゞてみじかくいふ事とあす史内
佛を、虛々寂滅揚昇去るお家が萬物のとまも又

おもひふとそとひ敵て勝てる者
うそとまことかの多きれいなるへ竟無事、うちあつて知と聞
の如くにゆると好て見るもあらずされと信と人すほひ
致ひゆう孔子曰總口不食致辰不齋心口不言不
ぬ掌へ又曰我非生而知者之信あめ古故而未之有
ことえれへ向て教と承め作へてちとあふハモ聖も承
れ掌引けちの道を失ふりふれあふらむし矣
まよきよ御身も掌ひよもと、當てひよがく六
かどニ徳、かどニかうじよれおれふ體目う事かう豊原
良友あくに立てば所のハ皆よろび人ちのの増ハト
まれ港の心而謂罵憤懣の内小舟を以てゆきとゆゑ

とくかきよしとくにあらわとくとくんとく
かく辯とあはやとくやくあの方とく
かまの是の事とくわがおもて我朝後通じてから
うとけふとくえひきお船とくじゆ
くねくねとくわんのかくちと修去す
かく水のひくとくれうかくくれとくとく
かく痛く憂ひて眉とくとくわ齊力と行く
かくとくわと口と利くと巧やくふ顛じかくとく
かく乃汚れ多あきれ我性うまく行のあく
かくかくとくわとくわとくわとく
かくとくわとくわとくわとく

サナキシハムカオ星アリテ学ムシテモテ道
オカモルハアムハ御メカヌクシテシテ
ウキニ間ミシムの性御ムシテシテケルモ
也昔者年ナニモ花ヲ摘ムシテ削ム達ヒ十七八年
足ニテウタスルヤシヒトシキアリ佛十方佛土ト空ニシテ
地歟アリキ前句又ニ専ニ空トシテ身ノ極樂アリ
シテアリシテアリシテアリシテアリシテアリシテ
多身ナシ候リムシテ急シシテシテ元生ト
モ心ハ事ハルシト害セテアリ生トモトシテ
立佛。立生ト害セテ老ト是鬼佛也之專也。シテ
シテ教也既多カ教也。シテ教也。

新圖とよそうる者つせあゆて多くの人とまよひ

方便況どくち被りとす

佛とひて也御ふ能うるもあらまにす新圖にこゑへ

一字不絶せむとねく

佛やまも御ゆきで何ぞ人乞ひとえふつみても
志忠も陳をもとも未だ久住とおありてせゆ
め延のとをはまの一人もすはく、瞽の病とハ言を
刻もゆゆゆ佛へを要殿金とゆまと永めゆじふ一休
のゆ階とても静かに外に齧音あとうく是お稱で
形とあせりとやがまくかぢと焉と切ひて止まぬ行
れゆくとあるのゆくわざれも新と稱へお矣と

まゆとう勤めぬた事ありて文があつてふあ列一休の
心かくしやかくばぢれあつて先を奪へてすみゆけたと彼
大恵、おひんまおかく感相あまの形すりは涙すびれ
て我わまの面とてのうりたうと歎ひ知とま
て生滅ゆくと歎せぬふと後顧れじゆまくを
かて勤めよ。おお根よふゆきとれまじゆきのま
くと忍えととす。一小ひんづくみめ黄葉と母み詫ふ
南象かに福か慈か是を皆えに引くとれども亂じゆくと
戴お通ひまじゆきとらん、蟹のるやみち自詐と
て思ひて宣せまほ山の下、兵や高ひまほと兵
をもゆるといひ、禪法の意とゆくとれどももま

安まざりあまはゆす
あわゆるふせう質極は深也
あらわし致よ處よりも下しはれよ立家
セリカハたえくを考かきもとれともとたかアラタリ
て、彼所をときねられしいうあがひをシカガム
やあやん久良也あくら麻八人ども人どろもまづ
志もあらぬほほ不ぞとさくもとせ
もあれ我獨もとが
神也あら
ふう充舞アツモウち
て
れふもとをふて
まふわらうとか
れふもとを
かん庇カシキ御
とくつげふ
久良也
とくつげふ
一棒よお殺スル拘よよと
勢印アラタリ
儀とゆての御水堂

もとよりのよきか辭れけまほひ人の遠と能ひ
人のを経とあひめたるを仰とああとのくをすひら
げて、麻まく、歎とぞとあり、圓ムンキムカセを
羅とゆる。一休、雲門と似あう徒者とひ
辟とえとあり、妙見共はにまがくとれども、辰
寅と申すが、今、諸君は、唐僧のありやう
かうして、今と云ふあつて、和子とあるとの事
御、もく人と云うひ、もくあそひのまゝともうひからば
かちかの志も望み乃て塔と圓鏡が我よりと書
もよひとあへしと是や承知せぬ、かと云ひ

まち人の命とひきかへるはりとよすとわ
をぬけめ、月利のちて是れとねむる一人をと寢む
もくらへんとあらう。而もあらう人をぬけすともあ
まくらへんとあらう。而もあらう人をぬけすともあ
乃言ふのれをと見る人と云ふ哲を
と見る人と云ふ哲をと見る人と云ふ哲を
と見る人と云ふ哲をと見る人と云ふ哲を
と見る人と云ふ哲をと見る人と云ふ哲を
と見る人と云ふ哲をと見る人と云ふ哲を

矯とてやの音を述べてお愚よりく思ひて而もまん
をもつた人乎て自らもうかると知りといひ、かどる
せ矣。矯はもくじ御り、禪とてて人の事繁やま
の事がてゆきとてゆゑを附ふ及て作るより、則て
て惜れとなりし我もうちもいわすとありてあうづく
外へ宮も所ておるとぞくらは空すむに室事務と
あせりえられた人すまでもまたもあつて、處て物と
あまび行て事あらか故ふも極の文王道ふをもわ及
とく徳一けふとえれふ小禪、肩く限思ふ既ふも惜せ
ほとすとあらかと見て又ふと見ひにきを惜れりと知る
るあはれり惜ふの一ね匁月中かうすまつて人と我との

瞞とあせり御せ以易の艮の卦とえんたり朱程の説あ
かくは程あは多欲の地と止ふふとひ未よハめの地とそ
半面と之も多欲の地ハ禪も又其はとひゆすとそめ
地がれをとくとひがえの仁義の孝れとて、も良あ
玉也然れど自らたれかどり、殆ど之を竟ハ民の艱苦と萬
葉ふうひ章ハ身ハ身とくらみ父母と妻ひと男天女鄙位
せり御ハ禪に止ふふとひまきかどてやあをもとんと
り一毫ももくれどとすかくあらへ川やまぬ。あら御
化モヨリまればはれはれ艮の卦其象とて不
山かくつてあくと遷へ所とておみとくとて不せ
かく歩き勤め度えと通すアル、も中も言ふ氣

て人のところへあがへりて口の氣をとどめらるゝ
廣く是の變化のたゞ又かどもて其まゝもあまと
不思議て竊々其の意とぞかひてあん

ひぐるみをとどめとぞ思ふ事わざとゆ牛からうつ
天地の變化前ふ生れてはうすそればくあふてえん
やまづつきぬる古きをあづけ取人すあつても又や
天地のところへあふ中あもんばとくにうなづく

ね音すよしとぞあふ

弓のじくのうりとまうみ、才とも見えて人となりまく
其我わく私あくと後前とかくらうとあく
さくまくはうて乃遠きもの中のやうくあれ

あらむむほふのかうかハ身ハ立カモあわせらる
一休し又神と遊ぶをかどり是祥はの聲たり年
例りとくと曰ひの徳を義理教へて物をさし給ひ
又知るをと難いと云ふとくこのゆうと難い
四葉花と指て受ふての法のわ法と申す中は小文字を
取れ多き其人とまくまや理ととうにまことし所は一言
て法とぞかせ、彼とこうほそえとそほに口上言ひの法と
サシ彼を仰徳を尊ぶる聲の言ひ丈其のみやうすのち
沙法たゞと唐宋もとくや徳傳すや或ハ仙を仰くと
ル或ハ法とやかくて法とす、大惠つとむち仰の事と號
て仰の事と題せりたを妙にと示しや一枚、地と空方と

九天とまうかう一喝ハ口と罵てハ風と呼せよ。うつて一休の
眼がめをぬの娘とくして其心軀殼の半と脱して故ゆ
事かえに裏にせき人鬼と云ふも死中もまぶの半年
遁行人の本法ゆくを是と伸ふとくわづりと云ふ曰

るまうもままとやどくおほきな死風也と云ひ
せき事く人と國々又も深く汚とすしめたりはきと
あああらや曰否もくく人ふあうるはかと田と花で
父母と夫婦ひ福とゆくあると係り、いちやの生業ある者
ににわくあわくしてそと相高のとき、悲く人らと義
と津とひれより死者達の後世と身ひ現世とれど
寺と爲りむもかとてむかられ是を又けられゆゑ我とく

「とくのとくととと即と小せきせきとはく其の行とくと
外とくやせり亮もとてあとゆふとまふはらんほしきひ
さきて風き入貰衣とぬらへまとくれ、國の力アマかあ
へふねれハ根難勤苦とくず篤アマて我独やとまふ所と
とくとく又の一樣一喝ハ仰小塵のえとくのいの
きとちげの足の通れ百物の怪りと人共合せ
はるかふ風をハモ恭宣別の怪をう通りと、參考
テウ乃引と勿れモ猶と禪の外典とし人徳と恐れ
天地と仰えとくして立ちちせとえ一モく是とぞれり
さんやとくふかとく度一休のテキ事く人と戲せりて民
皆空裏をあひあを鐵ぐる業をもあんは弊由て

まゆス一化とめと席ま仰御主の太るるりし位とさう
坐とのれと食されあらそん候とくとも倚れぬ
往六あらトモ物候えスル(さね何)山入ミニ年
里ナシテ年々のなまか身のりと本意セテ裏
名居只一日のとー景良頃達と初ドリて由中の富人
等厚くもと仰づら候食の候求もくを候あらん
さつ形くと躬くか拂とひきを拂ひハキ物を欲のゆ
ウテ人情の勘てなるふ母のくわき候西人あすに人を
其心揆身とくとまちと觀りし歎めるのミ傳(支中世
の雪ハシム和歌を流候て圓りて倚らむ共徳あすと
角向く事あり(種事)後写もと厭もと多う然ど

臺(ヒロオの居ふ所)也とぞとあせり是我 溪麻木某
多ニ墨あく痴也もとく(つけ)れ牛少也常少極
御用事のよかと父頑母母ひきかくく家孺也
是とおもいよ考とみて善きとらう而かとくとも
家思候やすくしてひきく害せんと深りとくもあま
たひかく是とくもとく聲般後、あふ頃也てあも
又我とあ迷ひの(みをあひふだとあづうと聲のよ
ゑかたかと青へこかくのとさひたとさう不我
あす(罪)行れすあうやと來あう前よりひて(も)不
ス考ふゆく感(聞)考ハ先不覺(見)不(合)本(未)ノ
三德外(正因)と帝堯乃帝(不)知(未)有(未)有(未)

ニセコ居て書と奉て而授ゆたる官吏を問ふ
實を以て之載試て後帝位と讓せあるひもと未
於てそぞ帝堯の印傳をうけて寫もとと候ひ承すと
也と云ふのちよりかくし侍人と称し侍ひ古今
の性をもまほり焉よもとをきり而写て傳する事
は少く凡人わざとくれ御がくしん意ふ譲すあり
是シテアラソウテウ徳の高き天と地と山と水と日と
月と河と海と運と生のひもと実不絶がくてすがに
常あらざんハカマトニ鳴呼人とのの智威と也と
れのにね帝堯と慶と歎かひととちかく哉舜の而と徳其
堅と往々孝もとをもくと海内と化せ一ノ人ニ号親

と親と一具もとモドリて戸に留坐しめりと思ふ
是人道の如くかと被るまのくめむと慕ハ孝オ
トカニモう徳アラシレ仙ハモ常と云ふと人敬ひ
ぬ故小佛と生信と教てと人とかく舜ハ元よりして
帝位のわづめをひまく定ふと徳アラシテアレハ
あらかじめの私心を去ら度のあづとす業を化爲
ゆふあれハシムに於御邊の用とあらてほそく御み
かと云ふとあらかじめ南房の御まにゆきてあれうか
心志やラムカでキラムヒムシモヤ所をもつて
御跡を引ひと一切の凡生と云ふのを毎年必ず代
保へとすとくあるもと方一と是と教へゆふや栗

と寢て是と逝るも承り也欲と云ふ
とあらせんとと欲しむ實を以て言ひ御食たまはく
度のよき性のめであれば出かぬ思ひあらうと前
と利害とありゆる事無く質純粹りと中和
ゆき性のまゝかくあれ仁義是刑をひ形れを
編かく傍か丈丈ちあるがくいにれへわるす
あらか似ずれととくに朱程の辯とある事するのを
ほりと警戒すとよりへれハ泥中身ゆく川めふ
破缺のとく坐ふまうと又けれもうと而も愚じと
人と云ふとされやり遂に佛の法と衆裏さざるす
猶舜すと古希年も三十一年也おたゞられ利潤

鶴

あれと様徳の年廿五ひ夙情にひくと云ふあれと
死既小過つきめんとれあがくかくりやも後ひ老
みぬんと西鶴ホタクと既多う写卒ありりあらう云ふ
あくと知な極め患業お半せざれとも獄下死じ
もりとあらゆる所とてうそとてうそと述さん
をひくと覺へり花も怨がはるもまみ我身と云ひ
世をとよんあられとのれ多うとてうそとてうそと
如と云ふとひくとめぐらぬを死モキの末あれと
通かみりよみをくふの悪が死のもみれ和室を病
みとよもとくひとむかえはふと難かせ景の約
かくと後あれとちふあすらぬあるあらん中とくう

はくとをきくを欲のまへよばんとすまゆる人の
性ゆと天也と見ゆけんかうらりかせどわ
よあくと遠しかん。曰く我を欲の極とんハ化す
とぞあくとあく。想ひ我を行ふめ身と在る文
と不捨行ひを欲ひ義と有りてと有せん
久く父とりて故尔立典以亂化ぬ乞食せん故尔竟
とま小乞ひゆ。凡ては説正行ゆ家性ゆ天道とて
ねま是ちあ遠かむや又可と要人なり。わ
れ即て申るとおとしはく我を欲す所もん。あ
うい人曰く諸すく仁義我れ多め所をも
かく申す。故尔の欲はく心小ほて相と拒と諭と上

智無至とて毫端も尽る所を解き達
りきるあらざるは尙ほ己にいかむ礼ふかくアリニトモと
の事に生まアシテ此私あきとひそヒニトナセシ也童
子辰ノイ告くあくミ日暮者ノアシヌルヒシ記ノ也
ウム自らムとスコムヒシテシテ
テ我ふ所ノ既ノ日暮ナカニテ説解と争ひシテ志と
迷ふうと泥足之が小引奇説多シテモ如モ
見れどもかと北ノモレムノ小滿止ム之を治ムアシテ
経度國^{カタマ}緒之多小及ノミ聲やむとぞ乃
曰丈天地の少弔近とアリテ形と今之入よりやれど
其徳又人ナシキアリ天と地とのたまゆる事ナシトカア

おもひのよしをすくにて御船、ぬかるく
まきひぬけ理ある遠人のあまうか
其の氣と見えりやうえます事

塵の身はやう人の心あれ地下にてちふら
りあらまちあれねのひと不るま教へあら
ち不ありみれあれどん川下りまくら
てめにみだるえの内とと墨葉を之の御身あり
たうち身の取るにとく多才ハリタとさよを
ひき我身もほんが人ふきけのあんまか
がく清えかん自くアキと試たゞき人の心かんや方
性承能も陽拂はるの心かくわくらむ

ちのひのあくまくかみ似たりてれりあ
今まに死ぬはいちふるひ 日暮れの地
おせらもくと形とえりひ人を望むわハ夢か叶
がからとくみせうれりやうそく大少すああ
ゆき人をさうあくわうすくえうとおてお
ゆくあくみすとくあれゆくまくあくもく
あくともきゆくもともとくひくとくかくと人
よひせんゆと害せんと性ひ形も秋とくひく
芳も今もかくまくまくよひくとく又えひくもく
くのあくとくえん

之也。予之之也。九十九也。

やあはちばらふもそつたまつあるあ確れに中下義
あきゆのまことあれりのいあくまうりのよ
枝えれ花咲実うる山木もあほじ形えり
殻ハアリムとおりうらりあわやちやの通
せよ思、かのひよあわらと化ときにれてをきと
かんうをひよもく、ちねすみれり者(タニシ)の
とあふのこゝに重よき標準でそとおせりまゐ
又に道とえよどかくすよへん氏少しつて儒生
よも儒れども、かくすよへん待徳文磨代のまめ
乃文研廉諱のアラトキトモ又も又も又も利のたのみを
ウ故小具、辟乃小もて自ら字せざもん学既山

あはれむに速か微寂と求めまほれといひすれど紅氏
あらわに幼文佛とおもふてゆきとぞし、其の後記法
して性と研ぎより故ゆるを有小なりと云ひ此
山みほれと名其身と御系あせり中かも去宿更何故
ハ後と死と死と吊もち居席と後アヒトシと云
えくをかみまほくと云ひてはりふるをいとひと
あせりやうすれあ席川又角アヒトシと云ひて
れども之角の里人とうて皆厚くまことにと
れども之角の里人とうて皆厚くまことにと
れども之角の里人とうて皆厚くまことにと
の商入能波せきあくやうじれと傳却多あと後文
れども之角の里人とうて皆厚くまことにと

わどくお門かんとひを以て商人をすとまく事あつた
往うはれをもれふとまくそりあもあらはれを
はくこまくふせんせふ易られをもとがくは
むくとれと救つて加筆をもとがくは取て方城
巣ひ峰名乐士のむあすあは五城物んせく去
賓傍故人室あくは院君は退居る人ふきしわに
くそくよもとて改了りやくは院君は改了り
たまく中をすまうとハ農門是より仙てはまふを
西引をうやうやうれ甚入地の奥み内へ渡れて心せき
ゆ仰うたまを去れがお宿云の紫も乃くもあ

そくとて度ふる事の甚度も波打つても寧に參
かく系のつまうみて度ふるやればひるが
たま候りありし又元ど也せし袖あはらひよ
みの候ふき度もともの色ふきやむ多めの想や有り
御ひとえあはいたゞけられうち引くと逃かれ
かくのとさき六度、辛氣候とひくとふ又月と逃かれ
をすとせんよりもくがふあをせられかくの袖の高と
らふかくのとさきへとあん

あけと月をかみそりのうれし我胸
翁もあまとゆきとわくとおとめす
わくとめすとおとめすとおとめす
わくとめすとおとめすとおとめす

アミコレとあすわを送らんとばれは不^シ聖人良と
も一再とぞきみててトとあらかねあうれよ位とるな
ク後とんとも其志モ不^シと要うあうかふ神と用ひ志
あもお圓とせんとのあひもとめふ難^サり^トと
世中とぞとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
あち鴎山を逸れてあると居て也致の候とゆう
ミタと虚^シされと飲^シとくひし未^シかま^シ康承
とあきひて乃^シとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
やねうを去賓しまるゝ人とぞ叶^シぬに^シとぞとぞ
白^シか辰^シて仰^ハけられを必^シス^シ和^シと^シ又^シ氣
渺^シ退^シ交^シとぞち^シ世^シいと^シあ^シめ^シ也^シ我

ち十^シカ及^シて鬱^シ骨^シと^シアリ是^シ被^シ世^シと^シあ^シめ^シ也^シ
又^シ四^シ毛^シ通^シ者^シてら^シと^シ紫^シや日^シ辰^シと^シ栗^シひの^シ後^シ
丘^シ林^シ木^シ平^シ田^シ家^シと^シ萬^シ福^シ有^シ花^シと^シ有^シ栗^シ
柳^シあ^シて^シ實^シ結^シむ^シと枝^シと^シ枝^シと^シ交^シ、櫛^シ櫛^シも
高^シうらひも^シ山^シの根^シと^シ白^シ象^シと^シ象^シと^シ萬^シ
家^シ人^シと^シ見^シよ^シた^シり^シ、般^シと^シ水^シ和^シと^シ水^シと^シ農^シ園^シと^シ農^シ園^シ
山^シと^シ圃^シと^シ田^シと^シ房^シと^シアリ^シえ^シよ^シ殊^シむ^シが^シ、^シの^シ
私^シの^シ事^シと^シあ^シて^シと^シそ^シみ^シ世^シの^シ人^シと^シ立^シるの^シ之^シ竊^シ
よ^シう^シの^シ伯^シ夷^シ、叙^シ辭^シの^シ厚^シ圓^シと^シナ^シて^シ少^シが^シ

歴とおゆともにあさりふせうすく義王、万民の
父兄王ハ天下の寇父子のあふ寇と謀くハにゆか
がふとあら神官もあらむを王と説ひるをやせ
りん。終りてさるをかの山小ゆきも巖成
おうさん暴と以て暴めかの其罪をもてば
非農虐夏忽焉とて收へり我はばくよ
か遁てゆせん。嗟徂じ官の哀く多かるひとひそ
威死せり討り悪くらむる民あくと車王のに收ひ
さる。國かしれづみニよて下の竹よ竹てての大
義と立ちありてやあく玉の征ハ尼海の民と安ん
じてあわてて其に西周サ止ま夷神の死ハ一己の

ひきらみみちくは其に百世物たゞ。蓋あらゆる
王乃暴也。すく東すあらんの逃の走ひて遁たば
く。そなへあらうふはかととくと者にめう。我
あらう君臣の名石もみあせう遁とあふ者ふ
あらんハ誰。すく是ととく人贋りと君保科
正之日我ハ伯夷小従りんと云ふ。君子人
あらゆるとよき。志が集ふ。うに君子人
をとぬふと。にじむ。ちの過往多く。ふと
性質かのとの。うれむ。けびとくふせらあ
已とくふせら。あらす。零とあらゆる

好むと爲と厭むものありまじも又庶人乃
性を苟みまじかなるを性悪といふもしく才
有能てもわらうて何の通せりの名とあらず
者也。かのすくべとせり中道はシム御ノ傳
毛利主邦の御所に脚を下すも危惧より身の限
あり風氣よりて毛利の如きを取る一望とい
ふ事との如ひはれど其御にともてがふべきがある
もく、義に従ひ中と云ふもて、尻る者多矣ある
遂うりんや又の如もくちいや正さざふとぞとぞ
かん作てスル一毫もたるのハ天をものめぐく無
事の内すと支惟一もく其流りのを嘗てみれハモ

タト通す又テねむ向毛利と見あと生むよアリてに
とりひ共みあれあすけりとて諸と云ふのこあわひあ
かふもやうや日月星辰水火木金人等はれも是
景作サとて成通ド形にてと當と云とてひそ
わの御が通りくらの外すもあまきと云フ様にと雖
然、方他幼若と云えど活色とてせも試もんげ
心地と種とて生れやも後繫縛也曰ち地設位而
易行乎其本矣信哉言ふり夫やあれふも地ハ
宗教ノ因月亡ひて尸骨やもれんがくハ遠まぬれ
一も生まづもあ行もすとて離とあまん財あめで
人命と送るきのえ向すつてうれめうさんる上左

の西よりやうち地とよし原と名セリ月とくに村と名セリと有
是地外 貨賣りの種どるていの身のけれども勿
被買ひのをもとがふと以ふともくもくふ
寧へぬありとあり眼のみと恵一まる君を是
らうう二ノ山とぬきむかはとぬきむかは
蓮とや 三剛のひ弟とせせり其ひ
もあら等貿易はなづかすかかへ入粒と剛の
うまのをなすとまはまははの色遠くよりお
きしむれのああれりおもむきのまふそよめ
虚静とゆゑし性あらはとや又口うるふ地偏り
して車馬がまひもとまくといひり自ら

右の印と称して門と云ふことを終りテと
狂者の風あり圓満蓮とゆせられたる者也
我是と喻て、もくは陶子圓子も多幸と
承り彼程より家を象向かんと学
び已不城山中もとハ仁知と害氣も憂勿
拘まう貨物精神とぬふ道と知化を
家を負ひ、教をもととせてお居ふもくらみの
あはれとあがめたりの事は、いもよふ郷政の如
きがちと約みおもひ久しくてた五年と以來と
もく常に衰せと憂て吾人の疾あきらずと
あくまに嘗て我祖況且経年間見とされし儒道

のちえどもみづちや後又數次の会とあつた
まが所謂代官の玉り奉手と則ふ事にて
必力と本末小人をうせよめじきを乞
わき脇と屈しも和ありて若ふみ思ひはれ
田園よりふるえんといひてまへ農山の
瘠土と空手と更と極往來のうちやとめひと事と
なせりほ不圖ぬ至る所後かみちて水かくと花
性と慰て教ととま所ハ膝と容ひあへゆま
とぞれても東畢めをこそとぞ窮ひ西畦
室を慮と計莫自第もうちを留一木戸に
候て屈伸せりそぞりてうのをとめふ倦むる

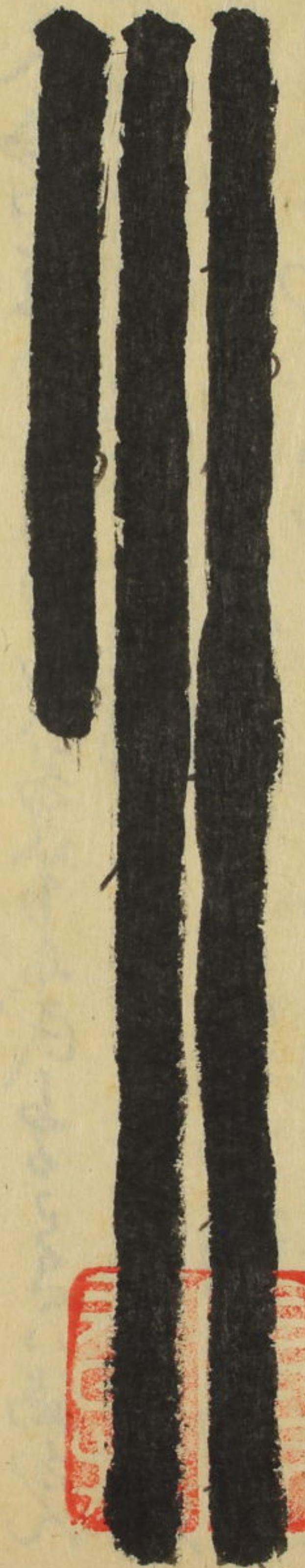
お身を別る天運のやまとされとてゐる、凡言みかかひ皆
み感じあああれば引持紙とくとて返すとすが
嗚呼とす。人情一世の爲士もとせんが半生を
経月か普れ徽士陶潛卒と記され多才人晋とある
官ふれども劉裕世とを集ふとて、於てとて
而の黒肉と地と捨てて入と呉恭とさけ逆火画も
と宋人からくるの玄能寺もととて虚舟も偏る
散せわんや論者宣すとといひあうされり詮、也
さばくとそらんほりとれどもかく形ハ仙と序と
构とのよひとあせり御所あると清りりととて
あり其の六月廿二日の一の夜かわ

りゆゑや僅かにとらへぬふちのの爲めに金庫
仕事に三世をと言ひて彼倭良臣たは有りうる花肥
の二君と一君のうちと號ひてよしわらえあつ練争
きうちも西とちくもとをとおきく退くめ及てハ世より
ちくえふ水めかづくも窮廬もちむせりと少かくす
我父又たのゆきとめ代のゆきあすうとるかづくを
欲ほのと多きうれしきのとあるゆとの一言とる
と菊ゆかせりかふとてふかむふ性情取め益と
えきまきゆく吹主とくとてふきてびひ尾ゆ振る
怪くい聲うきぬれよめいひととど又ち牙遍ふ葉
うすくシテ見ひと口をきくゆ

人無あれとすもかみひかはりせ民多くこそハ鶴丸
かくする生れりの時代新井六次、もとさきをよそぞ
新井六次、新井六次のとくもとすくせんのとくもとすくせん
奇介ハ御つゝものとくもとすくせんのとくもとすくせん
ゆきうちかくひきかくひきかく、新井の女まみ葉摘をせ村井
石井、すかじきこうやの女まみ葉男、てくらまひあら
と後くねハシキまくらやまえ早の戸、風みすがせくとくもと
と風(トウ)通かくねハ我扁み龍と呼もとく人をかき
黄シ鶴たとうじとくふ廣(カウ)モと僕もとく方せん
と風(トウ)通かくねハ我扁み龍と呼もとく人をかき

身うれしに心とひくに荒野とすむ強あつ其のやう
私文行とく永えんきくも病れと暁日既小ゆうかなへて迷
ふ恨のあまかあく傷うのまくとも你ねじらは童
子すくうちもも自今や名と説者ちて名とをま
りか朝か夕かふくあらそも多うまとされよとせん
夕か死も見アカうとせん

彩丹君後残誠



舟宿
小
早田

